

# 高齢労働者の安心・安全に働く職場づくりに関する調査研究 ～高齢労働者の労働災害の減少を目指し～

主任研究者	石川産業保健総合支援センター	所 長	小山 善子
研究分担者	石川産業保健総合支援センター	相 談 員	森河 裕子
	石川産業保健総合支援センター	産業保健専門職	亀田 真紀
	石川産業保健総合支援センター	相 談 員	田畑 正司
	石川産業保健総合支援センター	相 談 員	南 昌秀

【目的】近年、高齢労働者が増えつつあるが、一方では高齢労働者が労働災害に合う率も増加し、高齢者が安心・安全に働ける職場づくりは喫緊の課題である。しかし事業所での高齢就労者への環境整備や健康・体力の把握の実態はつかめていない。

そこで1. 事業所へのアンケート調査、2. 調査に同意が得られた労働者対象に転倒等に影響する身体機能を実施測定と身体機能への自己認識を評価した。

【対象・方法】1. 1016 事業所（回収率 24.1%）60 歳以上の高齢労働者の働きかたやエイジフレンドリーガイドライン等の活用有無等をアンケート調査 2. 16 協力事業所で働く同意を得た労働者 216 人（年齢 26～86 歳（50 代 96 人、60 代 103 人）、男性 151 人、女性 65 人）で「転倒等災害リスク評価セルフチェック」により転倒に影響する筋力、敏捷性、平衡性を実施測定及び自己記入式質問票で身体への自己認識を調査。

【結果】1. エイジフレンドリーガイドラインや「エイジアクション 100」の周知度は各 20.3%、18.9%で、チェックリストの活用も 0.9%の事業所で低かった。

60 歳～70 歳の労災事故は 182 件、71 歳以上は 35 件で 60 歳以上の労災は全労災の 32.4%を占めていた。

2. 2ステップテスト（歩行・筋力）、座位ステッピングテスト（敏捷性）、ファンクショナルリーチ（動的バランス）、閉眼・開眼片足立ち（静的バランス）を測定し実測値の平均値と実測値と自己認識の間の齟齬を年齢層毎に出し、解析した。

i. 実測値では男性は敏捷性、男女とも静的バランスと年齢層に Spearman の順位相関で弱い負の相関がみられ、加齢による低下傾向が明らかであった。（表 1）

ii. 身体機能実測値と自己認識との間の齟齬と年齢と

の関係は中等度の相関が女性の歩行能力・筋力で、弱い相関が男女とも敏捷性、男性に歩行能力・筋力、静的バランスにみられ、加齢により実測値と認識との間の乖離が明らかであった。（表 1）

【結論】1. エイジフレンドリーガイドラインやエイジアクション 100 等を普及させ、高齢労働者の対策に活用することが望まれる。

2. 高齢労働者の転倒等に影響する身体機能を測定した結果、男女とも平衡性、男性では敏捷性が年齢とともに低下する傾向が見られた。また実測値と自己の身体への認識の間には乖離が見られ、乖離が大きければ転倒・躓き等につながるため実測値だけでなく、適切な認識が持てるように保健指導が望まれる。

3. 体力測定を実施することで自己への身体機能に関心に向け自己体力の現状把握の動機づけになった。事業所も労働者の身体機能の状況を把握し、それに応じて高齢就労者への保健指導や環境整備を検討し、転倒等高齢者に起こりやすい労災事故を減少させ、高齢労働者が安心・安全に働ける職場づくりが検討されるべきである。

表 1 平均実測値・実測値と自己認識の間の齟齬と年齢層の相関

		(女性)		(男性)	
		Spearman の順位相関係数 (ρ)	P 値	Spearman の順位相関係数 (ρ)	P 値
2ステップテスト (歩行能力・筋力)	実測値	-0.2220	0.0756	-0.1119	0.1714
	自己認識評価値の差	0.4030	0.0009*	0.2291	0.0047*
座位ステッピングテスト (敏捷性)	実測値	-0.1181	0.3486	-0.3044	0.0001*
	自己認識評価値の差	0.2576	0.0383*	0.1927	0.0178*
ファンクショナルリーチ (動的バランス)	実測値	-0.2139	0.0872	-0.0796	0.3312
	自己認識評価値の差	0.1698	0.1764	0.0510	0.5342
閉眼片足立ち (静的バランス)	実測値	-0.2824	0.0227*	-0.3355	p<.0001*
	自己認識評価値の差	0.0922	0.4651	0.2734	0.0007*
開眼片足立ち (静的バランス)	実測値	-0.2432	0.0509	-0.3093	0.0001*
	自己認識評価値の差	0.1681	0.1808	0.2109	0.0093*